

「神奈川新聞社」と「日本新聞博物館」の見学そして 「横浜中華街にて昼食（飲茶コース）」

台風一過にもかかわらず天気には恵まれませんでしたが、36名の方々が関内駅に集合されました。神奈川会会長の挨拶、そして本日の概要説明があり、小雨の中を神奈川新聞社に向いました。徒歩で5分の距離です。近代的なビルに神奈川テレビとの同居です。広報担当の方に出迎えられ、会議室に通されました。



神奈川新聞社見学の内容は

◇ 新聞一般と神奈川新聞の現況についてのお話

- 新聞の購読世帯は50%、それも40代以下の購入世帯は逡減し、現在新聞を支えている世帯の高齢化が進んでいる。従って広報の中心を小中学生に置いていく。また全国紙を除いて電子版の販売も芳しくなく、さらに企業広告もネットに向かっていて、打開策がなくて苦慮しているとのこと、新聞ファンの多い我々には誠に残念な話でした。
- 新聞には全国紙と地方紙の間に数県にまたがるブロック紙があり、104社が新聞協会に登録している。その他に赤旗や聖教新聞、そして地元に着した地域紙がある。そして販売拠点である専売所を持つのは全国紙で、地方紙やスポーツ紙はそこに配達委託しているとのこと、これらは新しい知識であった。
- 神奈川新聞はピーク26万部、現在19万部と低迷しており、懸命に合理化に取り組んでいるとのこと。本社は編集だけで印刷は県の中央に位置する綾瀬市に集中、配送の便を図っているとのことである。



◇ 新聞ができるまでのDVDの視聴

- 新聞記者の取材の態度、姿勢にはどうも大きな変化ないと思われるが、印刷に至るまでのプロセスにはインターネットがフルに活用されていて、遅くまでのニュースを記事に取り込めることが可能となったとのことである。

◇ 編集局の見学

- 締め切り時間に近づくにつれて喧噪した職場になるとのことだが、午前の報道、政治、経済、文化、スポーツなどの記者席の半分は空席、人がいても静かにパソコンに向かうだけで、時折、共同通信からのニュースが音声で流されていた。



◇ 質疑応答

- 活字情報に親しんだ我々の年代には、スマホからの情報だけに依存する世代への不安感があることは否めず、新聞を応援する質問が多かった。

◇ 特記事項

- 神奈川新聞には神奈川会の昼カラオケの活動状況を実際に取材して、記事にとりあげて頂いた。その結果、多くの方からのお問い合わせもあり、実際に参加して下さった方もありました。

神奈川新聞社から雨の中、徒歩5分で日本大通に面した **日本新聞博物館**（ニュースパーク）に到着しました。今年7月にリニューアルオープンしたばかりの日本で唯一の新聞の博物館です。それは横浜がいわゆる日刊紙が発行された発祥の地であったからだそうです。江戸時代には瓦版が既に文字によるメディアとして普及していた基盤が既にあり、文明開化の最先端が開港した外国人居留地のあった横浜が発祥の地であったことは肯けます。





• 先ずは入場して集合写真を撮りましたが、これは後でお楽しみとなって還ってきます。展示は企画展(今回はオリンピック・パラリンピック報道展)と常設展示とに分かれていました。常設展示は新聞の歴史、新聞の届くまで、新聞の理念など多岐に渡っており、1時間の見学時間では残念ながら見て回れず、多少悔いの残る結果となりました。小学生の団体も来場して見学していましたが、思わず将来の新聞愛読者ならんことを祈ってしまいました。



そこから雨脚の強い中の徒歩15分、**横浜中華街**の中心の重慶飯店に着きました。皆さま難儀されたのではないかと心配しましたが、その分どうも食欲に火を注いだようでした。9名掛けの円テーブルが4台、早速事前に各自の注文を受けた飲み物が要領よく手配されて、乾杯、それから結構ハイペースではないかと思われる飲茶コース(四川料理)の料理が給仕されましたが、それなりに皆様、歳を忘れ平らげておられました。円テーブルの効能もあり、一日の思い出話、そして昔の話に花が咲き、瞬く間に解散時間になりました。最後に皆様の集合写真の載ったタブロイド版の新聞とこの店の5%割引券が全員に配布されました、今回の二次会は時間の関係で中止、外は相変わらずの雨でしたが三々五々の解散と相成りました。



文章	中井 順一
写真	石川 義明・木村 一雄
編集	富山 友次